

西村京太郎の作風変遷：デビュー期から晩年まで



若き日の西村京太郎（1960年代、デビュー当時の肖像）西村京太郎（1930–2022）は、生涯で647作もの推理小説を発表し^①、「トラベルミステリー」の第一人者として空前のベストセラー作家となった人物である。本記事では、西村京太郎のデビュー期から晩年までの作風の変遷をたどり、批評家による評価と大衆の人気の両面から考察する。特に、**(1)** 長編と短編執筆比率の変化と作風への影響、**(2)** 初期における多様なジャンル執筆から特定ジャンル（鉄道ミステリー等）への傾斜の時期と背景、**(3)** 各時期の代表的作品・ヒット作とそれらが批評・大衆評価に与えた影響、**(4)** 晩年の作品に対する評価の変化（量産による評価低下や継続など）について、信頼できる文献のエビデンスに基づき解説する。

デビュー期（1960年代）：社会派ミステリーからの出発と多彩な挑戦

西村京太郎は1963年、雑誌「オール讀物」掲載の短編「歪んだ朝」で第2回オール讀物推理小説新人賞を受賞しデビューした^{② ③}。この作品は山谷のスラムに住む少女殺害事件を刑事が追う社会派ミステリーで、選考委員の松本清張や水上勉らから「地味だが破綻がなく、推理小説として骨格に弱さはあるものの優れた描写」と評価されたと伝えられる^④。また1965年には長編『**天使の傷痕**』で第11回江戸川乱歩賞を受賞し、本格的に推理作家デビューを果たす^⑤。『天使の傷痕』は当時社会問題となっていたサリドマイド薬害事件の被害児をテーマに据えた社会派推理長編であり^⑥、社会の不条理への怒りや弱者への共感といったモチーフが濃く刻まれていた。こうした初期作品からは、松本清張の流れを汲む硬派な社会派推理への志向が読み取れるとともに、作者自身の体験（戦時中の陸軍幼年学校入学や戦後の官庁勤務など）による社会への問題意識もうかがえる^⑦。

- ・**短編中心から長編へ**：デビュー当初の西村は主に雑誌投稿の短編で頭角を現しつつ、徐々に長編にも取り組んでいった。実際、1961年に探偵雑誌『宝石』に短編「黒の記憶」を掲載したのが初出版で、1964年に初の書き下ろし長編『四つの終止符』を刊行している^⑧。この頃は短編執筆が中心で長編は年に1作出すかどうかというペースだった。しかし1960年代後半になると乱歩賞受賞の勢いもあり長編執筆が本格化していく。西村は1960年代に計10冊以上の長編を発表しており、その初期10作ほどは社会派推理として評価できるとの指摘もある^⑨。短編では新人賞受賞作「歪んだ朝」のほか「美

談崩れ」「見舞いの人」など社会派サスペンスの佳作を生み¹⁰¹¹、後年まで名作の呼び声が高い。

- ・**多彩なジャンルへの挑戦：**興味深いのは、この初期段階で西村が推理小説の多様なサブジャンルに挑戦している点である。社会派のみならず意外なトリックを駆使した本格ミステリ、ユーモアやパロディを交えた作品、さらにはスパイ・戦争小説やSF風の作品まで手がけていた¹²。例えば1966年の長編『**D機関情報**』は第二次大戦末期の欧州を舞台にしたスパイ小説であり、「緊張感溢れる傑作スパイ小説」と評価される意外な一面を見せている¹³。1971年の『**名探偵なんか怖くない**』や翌年の『**名探偵が多すぎる**』では名探偵パロディのメタ・ミステリに挑戦し、ボワロや明智小五郎といった名探偵たちを登場させて遊び心たっぷりの推理合戦を描いた¹⁴¹⁵。また1971年刊行の『**殺しの双曲線**』はクリスティーの『そして誰もいなくなった』に挑戦した本格ミステリで、双子トリックという大胆な趣向を明示して読者を驚かせるなど、初期の代表的名作の一つに数えられている¹⁵¹⁶。これらの作品群は、後年「トラベルミステリー―辺倒」と見られがちな西村京太郎像とは異なり、**デビュー期の西村が幅広い作風を模索していた**ことを示している。実際、若き日の西村作品には清張ばりの社会派もあればクリスティーのような意外なトリックものもあり、さらには名探偵パロディまで存在すると指摘されている¹²。この多彩さゆえに、当時の推理文壇からも「シリアスな社会派の書き手として出発した」点を高く評価されていた¹⁷¹⁸。ただし、初期の長編はいずれも硬派で暗いテーマを扱ったためか、大衆的な人気の面ではまだ爆発的とは言えなかった。実際、西村自身が「社会派作家」を志向していた当初、海洋開発を扱う『伊豆七島殺人事件』や人種差別問題に踏み込んだ『ある朝、海に』といった硬派な作品を発表したものの、新作長編の初版部数は次第に落ち込んでいったという報道もある¹⁹。つまり**1960年代後半の西村作品は批評家筋からの評価は高かった一方で、読者人気は徐々に頭打ちになりつつあった**と考えられる。

1970年代：作風転換の時期とトラベルミステリーへの傾斜

1970年代前半、西村京太郎は大きな転機を迎える。この時期、執筆スタイルと作品内容に著しい変化が見られたと指摘されている²⁰。まず**執筆ペースと形式的変化**として、1970年代に入ると西村は短編よりも長編執筆に軸足を移し、年間に複数（1974年を除き年4作以上）の長編を精力的に発表するようになった²⁰。実際、1973年から75年にかけて毎年4冊以上の長編を書いており（1974年は病気療養で例外的に減少）、創作の主戦場が雑誌掲載の短編から刊行ペースの速い長編小説へとシフトしていった²⁰。量産体制への布石が築かれ始めたのがこの時期であり、その分作風も従来の社会派的重厚さから**より娯楽性の高い推理小説の「面白さ」重視**へと転換していった²⁰。批評家の山前譲も「73～75年頃の西村氏の作品には大きな変化が見られる。それまでの社会派推理から、より推理小説としての面白さを求めた作品が多くなった」と述べている²⁰。つまりプロットの意外性や読者サービスを前面に出す“エンターテインメント路線”への舵切りである。

- ・**シリーズ探偵の登場：**この変化と歩調を合わせるように、西村は1970年代前半から**シリーズキャラクター（探偵役）の創出**を始めた。1973年発表の短編「狙われた男」では秋葉京介という私立探偵を初登場させ²¹、同じく1973年の長編『赤い帆船（クルーザー）』と『殺しのバンカーショット』の二作で警視庁の刑事・**十津川省三警部**を初めて登場させた²²。十津川警部は以後西村作品の看板キャラクターとなり何百作もの「十津川警部シリーズ」に発展するが、最初の登場時点では作者も厳密な人物設定を詰めておらず、作品ごとに階級や年齢が矛盾する描写も多かったという²³。それでも**シリーズ探偵を据えることで物語世界に継続性と読者の親しみを生む狙い**があり、実際、西村自身も1971～72年にかけて「名探偵シリーズ」を執筆したことでシリーズ探偵への興味が高まったと語っている²²。このように1970年代前半は、西村が従来の一作完結型からシリーズものへ舵を切り、**キャラクター小説的な要素を推理小説に取り入れ始めた時期**であった。

- ・**代表作と鉄道ミステリーへの転身：**1970年代半ばの西村は娯楽性と意外性に富む作品を次々と生み、着実にファン層を拡大していった。中でも評価が高かったのが、閉ざされた山荘で連続殺人が起きる『**殺しの双曲線**』（1971年）や、洋上で乗組員全員が消えた幽霊船事件に十津川警部が挑む『**消えた乗組員**』（1976年）などである。『消えた乗組員』は大型クルーザー上で9人の行方不明事件を描い

た長編で、日本推理作家協会賞長編部門の候補にもなった力作であり²⁴、ミステリファンから今なお初期の名作として挙げられることが多い²⁵²⁶。さらに1977年の『華麗なる誘拐』は「日本国民全員を誘拐した。身代金5000億円を支払え」という大胆不敵な犯行予告で幕を開ける犯罪小説で、その奇想天外な着想は読者に強い衝撃を与えた²⁷。この作品は「実際に本作をヒントにした犯罪が起きたとも言われる」ほど話題を呼び、当時のベストセラーとなっている²⁸。

こうした中、**西村京太郎の作家人生を決定づける一作**が1978年に生まれる。長編『**寝台特急（ブルートレイン）殺人事件**』である²⁹。本作は東京発ブルートレイン（寝台特急）を舞台にした推理小説で、発売されるや空前のヒットとなりミリオンセラーとなった¹⁹。当時ブームになり始めていたブルートレインをトリックの鍵に使った点が功を奏し、鉄道旅行の情景と推理サスペンスを融合させた新機軸が読者の心を掴んだ¹⁹。西村自身はもともと鉄道に特別な興味は無かったが、ネタ探しで立ち寄った東京駅でブルートレインの写真を撮る子供たちを見て着想を得たとされ²⁹、この**偶然の発見が「トラベルミステリー」への転身を促した**と報じられている³⁰³¹。『寝台特急殺人事件』以降、西村は観光地や鉄道を舞台にした娯楽性の強い推理小説——いわゆる「**トラベルミステリー**」「**鉄道ミステリー**」の分野で圧倒的な人気を博すようになる³²⁵。1978年は西村にとってまさに飛躍の年であり、それまで堅実だった評価に**大衆的人気という爆発力が加わった転機**だった。

この頃から西村は「社会派作家」から「トラベルミステリーの巨匠」へとイメージを大きく変え、以後の創作の大半は鉄道・観光地を題材にしたシリーズ作品が占めるようになる（もっとも1979年刊行の『**消えた巨人軍**』のようにプロ野球を題材にした異色作も一部には存在した）。批評面では、社会性よりもエンターテインメント性を重視した作風への転換に対し従来の社会派ミステリ読者からの評価は割れたかもしれないが、1970年代後半の作品群も推理小説としての完成度は高く評価されている。特に『**終着駅（ターミナル）殺人事件**』（1980年刊）は「旅情ミステリーの傑作」として第34回日本推理作家協会賞（長編部門）を受賞し³³、これは西村自身にとって初の本格的なミステリ文学賞受賞となった。こうした事实は、**娯楽性へ舵を切った後も批評的評価と無縁ではなかった**ことを示している。

1980年代：トラベルミステリーの全盛と大衆的人気の頂点

1980年代は西村京太郎が名実ともにミステリー界のトップベストセラー作家として君臨した時期であり、同時に「トラベルミステリー」という一大ジャンルを確立・牽引した黄金期である。前述の『終着駅殺人事件』（1980年）で日本推理作家協会賞を受賞したことは作家仲間からの評価を高めたが、それ以上に**大衆的な人気がこの頃ピークに達した**。たとえば西村は1980年代、高額納税者番付の作家部門で7年連続トップになるほどの印税収入を得ており³⁴、これは裏返せば彼の本が飛ぶように売れていたことを意味する。累計発行部数はこの時点で既に数千万部規模に達し、社会現象的な売れ行きを示していた³⁵。鉄道や観光地を絡めた長編推理は次々にベストセラーとなり、「西村京太郎＝トラベルミステリー」のイメージが完全に定着する。

- **映像化によるさらなる人気拡大**：1980年代には西村作品のテレビドラマ化・映画化も本格化した。中でもテレビ朝日系「土曜ワイド劇場」で放映の2時間ドラマ「西村京太郎トラベルミステリー」シリーズ（主演：十津川警部役高橋英樹）は1979年の第1作放映開始から高視聴率を記録し、以後40年以上にわたって断続的に新作が作られる人気シリーズとなった³⁶³⁷。鉄道や観光地殺人をテーマにした西村原作の2時間ドラマは他局でも制作され、十津川警部シリーズはテレビドラマの定番としてお茶の間に浸透した³⁸³⁹。映像化によって西村ミステリーは中高年層から子供まで幅広い層に知られるところとなり、**原作小説の売上増と新規読者層の獲得**につながった。批評家の北上次郎は「2時間ドラマでおなじみの西村京太郎トラベルミステリーの人気は計り知れない」と述べており、1980年代の西村は紙の出版物のみならずテレビメディアを通じてミステリー界を席卷していた。
- **ヒット作と評価の両面**：1980年代に発表された代表的作品には、上野発夜行列車を舞台にした『**夜行列車「日本海」の謎**』（1983年）、成田空港を巡る国際的陰謀を描いた『**成田空港殺人事件**』（1984年）、十津川警部が豪華客船の事件に挑む『**豪華特急トワイライト殺人事件**』（1989年）など数多く

ある。これらはいずれもベストセラーとなり、しばしば文庫化と同時に何十万部もの増刷を重ねた。批評面では「旅情ミステリーはワンパターン」との指摘も出始めたものの、少なくとも1980年代の段階では**西村作品の質は安定して高いと評価されていた**。実際、日本推理作家協会賞こそ1981年受賞以降は縁がなかったものの、読者投票型のミステリランキングや文庫書き下ろし作品賞などで西村の名が挙がることも多く、また海外翻訳も進んだ（1988年に長編『名探偵なんか怖くない』がフランス語訳出版）⁴⁰。さらに2005年にはミステリー文学大賞を受賞しており⁴¹、これは**長年の功績に対する業界からの顕彰**であった。こうした点から、**1980年代の西村京太郎は大衆的人気と一定の批評的評価を兼ね備えた円熟期**にあったと言える。

一方で、この頃から推理小説界では新本格ミステリの台頭（綾辻行人や有栖川有栖の登場）や社会派の退潮が話題となり、ジャンルの多様化が進んだ。西村京太郎の位置づけは「巨匠」「ベストセラー作家」として不動だったものの、作品内容について一部の評論では「展開がマンネリ化しつつある」「毎回タイトルに列車名が入りパターン化している」といった指摘も出始める⁴²。もっとも、熱心なファンや後進の作家たち（綾辻行人、有栖川有栖ら）は「**トラベルミステリー以前**」の**西村作品の多彩さや質の高さに改めて光を当て、その魅力を語る動きもあった**^{43 44}。1980年代末に刊行された『華麗なる誘拐』や『終着駅殺人事件』などの文庫解説では、評論家の権田萬治が「西村作品に通底するのは差別への怒りと辺境への愛であり、娯楽性の中にも社会への眼差しを残している」と評するなど⁴⁵、**単なる大量生産の娯楽作家ではなく一貫したテーマ性を持つ作家**との再評価も見られた。このように1980年代の西村京太郎は商業的成功の絶頂期であると同時に、その作風が定型化しつつあることへの指摘と、内在するテーマ性への擁護とが交錯する時期でもあった。

1990年代～晩年：量産体制の確立と評価の変遷

1990年代以降、西村京太郎は高齢となっても執筆の手を緩めず、**前例のないハイペースの量産体制**を築き上げた。年間発表作はさらに増え、1990年代は毎年十数冊規模の新作を継続的に刊行している。ついに2004年には**新刊20冊（長編13冊、短編集7冊）**という自己最多記録を打ち立てた¹。複数の出版社から月例で新作を刊行するため、各社の担当編集者が毎年秋に集まって翌年刊行予定の12作を振り分けて調整したという逸話も伝わる⁴⁶。まさにミステリー界の“一大プロジェクト”とも言える出版ペースであり、この頃には「**毎月どこかで新しい西村作品が読める**」という状況が当たり前になっていた。

・**マンネリ批判とファン層の変化**： この超人的な量産はファンにとって嬉しい反面、作風のマンネリ化は避けられないものだった。実際、近年では「**西村京太郎の小説はパターン化しすぎていてAIが書いても見分けがつかないのでは**」と揶揄されることもある⁴²。ある長年の愛読者は「最近の西村作品は“トラベルミステリー制作ツール”で量産しているかのようだ」と苦言を呈しつつ、それでも若い頃に熱中した初期作品への敬愛を語っている⁴²。このように**晩年の作品群に対しては批評家・読者から作風の停滞や安易さを指摘する声**が少なからずあった。特に、新しいトリックや斬新な設定で勝負する若手作家が台頭する中で、西村の定番パターン（十津川警部が全国各地に赴いて殺人事件を解決、ラストはトリック講解と犯人自白、といった一連のお約束）は古風でワンパターンだと映った部分もあったようだ¹²。読者層も高齢の既存ファンが中心となり、若年層には「親の世代が読む推理小説」という位置づけになっていたとの指摘もある。

・**それでも揺るがぬ“大衆の作家”**： しかし一方で、西村京太郎が晩年まで旺盛な執筆を続け**安定したファン層を維持した事実**も見逃せない。西村の作品は「パターン化している」と言われつつも、毎回鉄道や観光地という異なる舞台設定や旅情描写の妙で読者を飽きさせない工夫が凝らされていた。長年のファンにとっては、お馴染みの十津川警部と亀井刑事コンビの活躍を安定したクオリティで楽しめること自体が価値だったのである。哲学者の清水真木氏は西村の訃報に接して「50年以上にわたり多くの読者が金を払うに値すると認める品質の小説を産み出し続けたという事実」に深い敬意を表し、その驚異的な生産力と持続力を「誰もが目指すべき徳」と賞賛している⁴⁷。実際、取材映像によれば西村は晩年まで原稿用紙にペンで執筆する昔ながらのスタイルを貫き、朝起きてから夜寝るまで机に向かい食事さえ執筆しながら済ませる日課であったという⁴⁸。パソコンも使わず口述筆記

もせず、すべて一人で書き続けたというから驚嘆に値する⁴⁹。こうした「職人芸」ともいうべき姿勢によって保たれた作品の安定感・読みやすさは、大衆娯楽小説としては重要な美点であり、**晩年まで一定の品質と人気を保ち続けた要因**といえよう。

- ・**晩年の評価と晩年後の再評価**：晩年期（2000年代以降）の作品に対する純文学的評価やミステリ評論家からの言及は決して多くはなかったが、これは西村作品がある種の「**ジャンルの完成形**」に達していたがゆえとも言える。むしろ批評家筋よりも鉄道ファンや旅行好きの一般読者から根強い支持を集め、「安心して読めるお決まりの面白さ」に価値を見出す声が多かった。出版社も新作を出せば確実に一定部数が見込めると判断し、結果として寡作の作家では得られないような**大部数刊行・累計2億部超という空前の記録**を打ち立てるに至った⁵⁰。晩年まで衰えぬ筆力への称賛としては、2005年に日本ミステリー文学大賞（生涯功労賞）受賞⁴¹、2019年に吉川英治文庫賞を十津川警部シリーズで受賞⁴¹などが挙げられる。これらは西村京太郎が単に一時代を築いただけでなく、その後も**長期にわたりミステリー界に貢献し続けたことへの評価**である。

2022年3月、西村京太郎は91歳で逝去した³²。亡くなる直前まで「SL『やまぐち』号殺人事件」の連載原稿を書き続けていたとされ⁵¹、まさに生涯現役の作家人生であった。死去の報に接し、多くの新聞や誌上でその功績が振り返られたが、総じて「社会派から娯楽派へ転身し大成功を収めた作家」「量産体制で読者の期待に応え続けた職人」「鉄道ミステリーの開拓者」といった評価がなされている⁵²⁵³。初期の社会派推理に見られた鋭い社会批判の精神は、形を変えつつ旅情ミステリーの中にも脈打っていたとも言われ⁵⁴、実際西村自身「虐げられた者への共感は今でも変わらない」と晩年に語っていた⁵⁴。こうした芯の部分を持ちつつも、大衆の望む物語を提供し続けた点に西村京太郎の作家としての偉大さがある。

まとめ：作風の変遷と評価の総括

以上を踏まえ、西村京太郎の作風変遷を総括する。

- ・**長編・短編執筆比率と作風**：デビュー期は短編中心で社会派の重厚な作風だったが、1970年代以降は長編の執筆ペースが飛躍的に増加し²⁰、それに伴い娯楽性重視の軽快な作風へとシフトした²⁰。短編も書き続けたものの、発表の主軸は常に長編へ移り、特に中期以降はシリーズ長編による量産体制が確立した¹。この比率変化は作風に大きな影響を与え、短編で磨いた緻密なプロット構成員を長編シリーズに活かしつつ、一方で長編量産によるパターン化も生じた。
- ・**ジャンルの傾斜**：初期には社会派推理、スパイもの、本格謎解き、パロディなど多彩なジャンルに挑戦していたが¹²、1978年『寝台特急殺人事件』の大ヒットを契機に鉄道・旅行を題材とするトラベルミステリー路線に大きく傾斜した¹⁹。**鉄道ミステリーへの転身は偶然のきっかけによるものだったが、それ以降の約40年を西村はそのジャンルに捧げた**³⁰⁵²。この方向転換の背景には、「社会派では売れなくなった」という市場の反応と、作者自身の新機軸への手応えがあったと考えられる。結果として西村は鉄道ミステリーの第一人者となり、このジャンル自体が西村作品によって発展・定着した。
- ・**各時期の代表作と評価への影響**：1960年代の代表作『天使の傷痕』⁵や短編「歪んだ朝」³は批評家から高く評価され、乱歩賞受賞などで作家としての地位を築いた。1970年代前半の『殺しの双曲線』や『消えた乗組員』はミステリ愛好家に支持され、協会賞候補にもなるなど作品の質の高さを示した²⁴。1978年『寝台特急殺人事件』は大衆人気を爆発させ、西村＝トラベルミステリーのブランドを確立するとともに、以後の映像化ブームも含め日本中に影響を与えた¹⁹。1980年代の『終着駅殺人事件』は作家仲間からの賞賛（協会賞受賞）を得ており³³、ヒット作の内容も評価された好例である。以降は十津川警部シリーズそのものが看板となり、一作一作の突出よりも**シリーズ全体による継続的人気**が目立つようになる。晩年期には目覚ましいヒット作こそないものの、十津川警部シリーズが2010年代に吉川英治文庫賞を受賞するなど⁵⁵、**シリーズ作品全体への功績賞的な評価**が与えられている。

- ・**晩年の評価の変化とその要因**: 晩年の西村作品に対しては、量産ゆえのマンネリ化で批評的評価がやや低下した面は否めない。ミステリ評論の主戦場でも新鮮味に欠けるとして取り上げられる頻度は減った。しかし、それでも**大衆的人気は晩年まで持続し**、毎年コンスタントに作品が読まれ続けた事実が示すように、読者からの信頼は厚かった⁴⁷。量産によるクオリティ低下を最小限に抑えた西村の職人的手腕（緻密な取材、安定したプロット運び、読みやすい文体）は評価すべき点であり⁴⁷、その点は同業者や編集者筋からも賞賛されている⁵⁴⁴⁷。評価低下が語られる要因としては、ミステリ界全体のトレンド変化（本格志向の強まりなど）や読者の世代交代が影響したと考えられる。だが、西村自身は生涯にわたり「自分が書きたいものを書く」と「読者が求めるものを提供する」のバランスを保ち続け、結果として**質を大きく損なうことなく量産を成し遂げた希有な作家**だったと言える。

最後に、西村京太郎の作風の変遷は日本の推理小説史そのものにも大きな足跡を残したことに触れておきたい。松本清張が切り開いた社会派の伝統を受け継ぎつつ、それを大衆娯楽へ昇華させて独自のジャンルを築いた西村の功績は計り知れない。批評家・作家の北村薫は「日本ミステリーの歴史の中で西村さんの登場は一つの画期だった」と述べており⁵⁶、まさに**社会派からエンターテインメントへの橋渡しを成し遂げた作家**として評価されている。西村京太郎の初期作品に見られた熱い社会への眼差しと、中期以降の読者サービス精神、それらが晩年まで一貫して西村作品を形作っていたことは、残された膨大な作品群が証明している⁵⁷⁵⁸。批評と人気の双方に支えられつつ変遷してきた西村ミステリーの世界は、今後も多くの読者・研究者に読み継がれ評価されていくだろう。

参考文献・出典：

- ・山前譲「西村京太郎の原点——“トラベル・ミステリー以前”の十津川警部シリーズ初期短編集『夜ごと死の匂いが』」(KADOKAWA『カドブン』文庫解説, 2018)⁵⁹²² 他.
- ・J-CASTニュース「『トラベルミステリー』西村京太郎さん 初めはブルートレインに興味なし」(2022年3月7日)⁵¹⁹³⁴ 他.
- ・『オール讀物』編集部編「追悼特集 空前絶後のベストセラー作家・西村京太郎の全軌跡」(文藝春秋BOOKS 本の話 特集記事, 2022年4月6日)²³ 他.
- ・清水真木「西村京太郎氏の生産性について」(明治大学教授・ブログ記事, 2022年3月13日)⁴⁸⁴⁷ .
- ・藤本哲也「“西村京太郎化する東野圭吾”と書いたけれど……『トラベルミステリー以前』の西村京太郎は凄かった」(はてなブログ/BLOGOS, 2018年5月14日)⁴²¹² 他.
- ・日本推理作家協会 編『日本ミステリー事典』(新潮社, 2000) 権田萬治「西村京太郎——差別への怒りと辺境への愛」(1998) 等⁴⁵⁵⁷ .
- ・西村京太郎『西村京太郎の推理世界』(文春ムック, 2022年) 巻末年譜・作品リスト⁸¹²⁴³³ .

¹⁸²⁴³³⁴⁰⁴¹⁵⁵ 西村京太郎 - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E6%9D%91%E4%BA%AC%E5%A4%AA%E9%83%8E>

²³¹⁰¹¹⁴³⁴⁴⁵¹⁵⁶ 空前絶後のベストセラー作家・西村京太郎の全軌跡がここにある！ 文春ムック「西村京太郎の推理世界」(オール讀物責任編集) | 特集 - 本の話

<https://books.bunshun.jp/articles/-/7051>

⁴ 歪んだ朝 - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%AA%E3%82%93%E3%81%A0%E6%9C%9D>

⁵⁶⁷¹⁹²⁹³⁰³¹³²³⁴⁵² 「トラベルミステリー」西村京太郎さん 初めはブルートレインに興味なし: J-CAST トrend 【全文表示】

<https://www.j-cast.com/trend/2022/03/07432447.html?p=all>

⁹ 11月16日 - 京都市伏見区の高田社会保険労務士事務所

https://www.sttakada.com/page_013.html

12 13 14 15 16 25 26 27 28 42 「西村京太郎化する東野圭吾」とか書いてしまったのだけれど、「トラベルミステリー以前」の西村京太郎は凄かったんだよ本当に。 - いつか電池がきれるまで
<https://fujipon.hatenablog.com/entry/2018/05/14/120000>

17 SuiriSyouseitu notes(書評リスト2000.01 -)
<http://www.st.rim.or.jp/~kobashin/syohyo.html>

18 45 53 54 57 58 『言語文化教育研究』第20巻 (2022)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/gbkkg/20/0/20_74/_pdf/-char/ja

20 21 22 23 59 西村京太郎の原点——“トラベル・ミステリー以前”の十津川警部シリーズ初期短編集『夜ごと死の匂いが』 | カドブン
<https://kadobun.jp/reviews/bunko/385.html>

35 50 追悼 西村京太郎さんが書いた将棋をテーマにした小説と思い出
<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/69447>

36 37 38 39 2022年12月 - めぐりあう書物たち/尾関章
<https://ozekibook.com/2022/12/>

46 松本清張の「点と線」は社会派推理小説の登場を告げるとともに…
<https://mainichi.jp/articles/20220308/ddm/001/070/106000c>

47 48 49 西村京太郎の驚異的な生産力——手書きで生み出された700冊の著作
<https://moralist.jp/nishimura-kyotaro-writing-productivity/>